

銀行の統合は、貸出市場及び金融政策にいかなる影響を持ちうるか

弘前大学 山本康裕

日本の金融市場におけるオーババンキング解消の必要性が語られて久しい。一般的に市場の寡占化は、望ましい事ではない。銀行貸出市場にて寡占化が進めば、貸出金利の上昇と貸出供給量が減少する事は容易に想像できよう。先行研究の多くがこの事を指摘している。

本論は、銀行貸出市場に焦点を絞り、銀行の数の変動が、貸出供給量や金融政策に如何なる影響をもたらすかを分析した。ここで、銀行貸出市場には、第1銀行が1行、第2銀行が n 行存在するものとする。各銀行は、将来収益の割引現在価値を最大化するように貸出供給量を決定する。この銀行間において成立するナッシュ均衡を導出し、その均衡の性質を分析した。また、本論と先行研究の相違は、銀行が貸出実行において必要とする資金調達に関する制約を設け、それを明示的に取り扱っている事にある。第1銀行・第2銀行が資金調達の制約に直面していないケース1、第1銀行は資金調達の制約に直面せず、第2銀行が制約に直面するケース2、第1銀行は資金調達の制約に直面し、第2銀行が制約に直面しないケース3、両行が資金調達の制約に直面しているケース4、上記4つケースごとに最適化を図る銀行のナッシュ均衡を導出した。

その結果、全ての銀行が自由に資金調達が可能なケース1では、銀行の数 n の減少は、①貸出供給量を低下させ、②その信用収縮は銀行の統合が進むほど激しくなり、公定歩合の上昇は③貸出供給量の減少をもたらす、④その減少率は銀行の統合が進捗すれば低下、つまり金融政策の効果は低下する事が判明した。この結果によれば、銀行統合の進捗は大きな信用収縮を生み、金融政策の効果は下落する事となる。

しかし、この分析結果はロバストではなく、多数存在する第2銀行が資金調達の制約に直面し、貸出量が限定されるケース2では、上記の④は、④'銀行の統合が進めば、金利の上昇による貸出供給量の減少率は大きくなる、つまり金融政策の効果は大きくなる、と変更される。よって、このケース2では、銀行の統合と同時に公定歩合の引上げを行えば、信用収縮はさらに激しいものとなる。

このように、銀行貸出市場の寡占度の変更は、銀行が如何なる資金調達の制約に直面しているかにより、その効果は異なる。よって、オーババンキングの解消は、銀行が如何なる制約に直面しているかを慎重に認識して進行させるべきである。さらに、銀行の統合が進められている状況では、銀行が如何なる資金調達の制約下にあるかを検討した上で、ケースごとに適切な金融政策を採る必要がある。